
輪廻天象

佳奈李 & 透獄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輪廻天象

【Nコード】

N5396U

【作者名】

佳奈李&透獄

【あらすじ】

過去……最強と呼ばれた神がある人間を助けた事によって悲劇は起きた。

その神は神でありながら人間を助けた事で死刑になる。

そして、現在。

聖イカロス学園高等部1年の伊神狂夜へ次々と襲いかかる危険な事件。

最初の事件で伊神狂夜は過去の記憶を思い出す……

最強と呼ばれし神が現代に輪廻天象！！

何故、神は人間を助けたのか？

どうして死刑になったのか？

幾多の事件を越える内に伊神狂夜は答に辿り着く！

俺は、ベッドから起き上がった。

「ハア、ハアツハアツハアハア、ハア」

また、あの夢か　　この所多いよな。生活は至って変わってないのにな　　。俺は、伊神いがみき狂夜きやうやイカロス学園の中等部三年で今年から高等部一年になる。そして、今日は登校日で始業式がある。俺は変な夢のおかげで朝早く起きる事が出来た。その代わり爽やかかって朝じゃないが

「狂夜ー！起きてるの？」「今、起きたー」

「朝ごはん出来てるから早く降りてきて！」

「ういつす！」

今、聞こえた声の人は俺の親じゃない　　俺の親は、昔神達と戦争をしている時に亡くなった　　らしい。その時俺はまだ8つになっただけであり覚えていないが、家の両親は暴走族と女番長だった。そこから来るせいも、変な名前は付けられるわ、毎日家に帰って来ないわといろいろ大変だった記憶がある。

今、俺が住んでいる所は幼なじみの家、両親がいなくなった後に幼なじみの家に引き取られたってわけだ。　　と話はここまでにして、さっさと行かねーとまた声かけられそうだから

「狂夜ー早く来なさい、大事な話があるからー」

ほら　　って大事な話？何だろう

俺は、何の事か考えながらリビングに行った。

「あの　　大事な話って？」「まあ、ご飯でも食べながら話しましょう。」

席に着くと、ご飯、味噌汁、漬物、納豆　　うーん和食だ？俺、和食好き。

食べる前に一言。

「いただきます。」

箸を手にとりご飯を一口。うめえ〜炊きたてだな。

そして、味噌汁を取ろうと手を伸ばす。

「実はね、旦那の転勤が決まったの。それでね、しばらく家を空け

る事になるけどいいかしら？」

俺は、伸ばした手を引いて言った。

「いいですよ。」

「それは良かった。」

再び手を伸ばし味噌汁を取る。

「ところで、どこへどれくらいいるんですか？」

味噌汁をすすりながら、

何気なく訊いてみた。

「えっと アメリカに三年位って言ってたわ」

ぶっ？

一瞬吐きそうになった。

「い、いつ出発ですか？」今日。だからもういくわ。」

「も、もう!？」

「じゃあ、萌香の事頼んだわよ」

それだけ言うと、おばさんは走って行った。

「まじかよ」

すると、おばさんが戻って来て、

「あっ！いい忘れてたけど生活費とかは送るから安心してね。」

とだけ言い残しまた走って行った

はあ、これから大変そうだ

とりあえず、萌香を起こすか。

階段を上り、俺の隣の部屋の前に立つ。

そこには、ネームプレートに可愛く『萌香の部屋』と書かれ、空き

には猫や犬などの動物が書かれていた。「萌香！起きてるか？」

部屋のドアを開けながら入ると、下着姿の萌香が 「・・・」

「・・・」

しばし沈黙。

「キヤー！何で入って来てるのよ！」

体を手で隠し頬を真っ赤にさせる萌香。

「すまん 起きてるかな〜って思ったから」

家からイカロス学園はすごく近い、歩いて5、6分くらいだ。

「これから大変だろうけど頑張つてこうな。」

「うん。一緒にね。」

（ああっ、言っちゃった〜）家系の決断をすると、後ろから声をかけられた。

「お二人さん、朝から熱いね〜」

ん？この声は

「あつひ 暁！」

「よっ！」

こいつは、日野暁。萌香に続き幼なじみだ。明るくて頼りになるいやつだ。

「萌香も久しぶり〜」

「久しぶり〜暁。」

俺達三人は、幼稚園の時からの中で仲がいいと思う。ちなみに、萌香の名字は、はっとり服部だ。

「あっ！そういうえば、今日転校生来るらしいぜ。」

「へー、そうなんだ。」

「だ、誰！！男？女？」

俺が軽く受け流すと萌香が予想以上に反応した。

何で、こんなに反応するんだ？あ、そうか。そろそろ彼氏が欲しいのか。

「確か：女だったな。」

「何ですって!?!」

暁が言うと、萌香の目がキラキラ光出す。

まさか萌香、女同士は良くないぞ。

（女〜！可愛くてもし、狂夜が好きにでもなったら…：阻止、絶対阻止よ！）

萌香からは、何やら黒いオーラが

「おっ、見えてきた。久しぶりだな。」

暁が言った通り見えてきたイカロス学園。

「流石高等部、悪魔や鬼が沢山いるぜ。」
本当、沢山いるな　ん？突然、俺達の目の前に誰かが現れた！

第1話 2

「ハ口」

目の前に現れた人は、背中にコウモリのような黒い翼を生やす、のほほんとした女の人だった。

「おおつ、悪魔!？」

暁は驚きの声を上げる。

言い忘れたが鬼も悪魔も神も皆、人型をしている。

「いや〜君たちもう始業式始まつてるよ〜」

その女の人は、マイペースながらすごい事をさらっと言った。

「えっ」

「えっ」

「えっ」

三人の声が揃う。

「始業式が始まつてるってまだ他にも歩いてる人いますよ。」

そう、まだ周りには歩いている新入生が沢山居るのだ。

「ああ〜そうだよ〜高等部は、中等部みたいに真面目に始業式!はやらないよ〜簡単に生徒会長と挨拶するだけなんだよ〜」

「へ? そうなんだ〜教えてくれてありがとう。」

萌香^{もえか}は、先輩に対してタメ口だった。

先輩なんだからしっかり敬語使えよな。よし、ここはひとつ俺がビシッと注意してやる。

「萌香、先輩なんだから……」

「とりあえず行こうぜ。大抵は体育館に居るだろ。さっさと行って済まそうぜ。なあ、狂夜、萌香。」

「あ…暁…う、うん…行こう…」

「そうね、早く見てみたいもんね。」

暁の言葉が入り俺の注意が終わった…

はあ、何でこうなるんだろう。

「じゃあ体育館まで案内するよ」

のほほんとした先輩は、翼を使い飛びながら移動する。

俺達は先輩について歩いて行く。

「着いたよ」

歩いて1分もなかった。校門入って右にある建物だった。

ん？こつて、中等部の時に使ってた…っていつか翼使った意味あるの！？

「入り口入るとすぐわかるよ」私は他の生徒を誘導しなきゃいけないから」

先輩は「じゃね」と手を振って飛んで行った。

「すぐわかる…か」

それだけ他の人と違うって事か。

俺達は、体育館に入った。体育館は大きくて広く日差しがよく当たる所だった。入るとすぐに女の人の姿が見えた。というより、誰も居ない体育館の中央に一人いるだけだった。

俺達は、その生徒会長らしき人の所に足を運んだ。

「あなたが生徒会長ですか？」

俺がとりあえず尋ねてみた。

「そうだよ。私はイカロス学園高等部生徒会長、霧崎ミストだ！」

ミスト…変わった名だね？よく見ると生徒会長の背中には小さく畳んであるが、龍が持つような赤い翼が生えていた。

とりあえず、自己紹介をした方がいいな。

「俺は…」

「私は、服部萌香です。よろしくお願ひします。」

あゝまたとばされた…

あれ？萌香、今、敬語使ったよな。さっきの先輩の時とは大違いだ！やっぱり、生徒会長だけあって魅力的なのか…まあ、俺や暁でもそうなんだからそうだよな。

「よろしく。」

生徒会長は萌香に手を差し出した。

「えっと…」

「シーナに言われなかったのか？生徒会長との挨拶〓握手なんだと言っことを…」

「シーナ？」

萌香は知らない名なのか首を傾げる。

「君たちを案内した奴のはずだが」

「えっ、シーナって言うんですか…生徒会長に言われて初めて知りました。」

「あいつ…名乗るを忘れるなってあれほど言ったのに…」

生徒会長の声は小さくてよく聞き取れなかった。

「何か言いました？」

「いや…それではよろしく萌香。」

「こちらこそ。」

二人は握手する。

「次は俺な。俺は、日野暁よろしく。」

「暁か…よろしく。」

暁も握手する。

二人共、軽く済ませていた。俺も軽く言うか。

「最後は俺ですね。俺は、伊神狂夜です。よろしく。」

俺も生徒会長と握手を交わした…

（こいつは…！）

「じゃ、そろそろ教室行きます。」

俺達が体育館入り口入って左にある渡り廊下の方に行こうとすると生徒会長に呼び止められた。

「ちょっと待て！」

「な、何ですか？」

咄嗟に俺が応える。

「狂夜…君は残れ！それ以外の萌香と暁は行っていいぞ」

えっ…俺だけ？

「早く来い！！」

「はっはい。」

俺は生徒会長に連れられ、体育館を出る。

「あ…行っちゃった…」

「俺達は教室に行こうぜ。大丈夫、授業が始まるまでにはくるぞ。」

「そうだね…」

「じゃ行くぞ。」

暁は先に歩いて行った…

萌香は狂夜が行った方を見つめて誰にも聞こえないような小さな声で呟いた。

「狂夜…」

ここは、生徒会役員室。

連れて来られた狂夜は、そこで辺りを見渡していた。部屋にある棚の上には、刀や銃などが置いてあった。「武器に興味があるのか？」

「何で俺だけ呼んだんですか。」

俺は、生徒会長の質問を無視して真剣な顔で尋ねた。「フツ…そんなに慌てるな。今、説明しよう。」

生徒会長は、息を整えてから話始めた。

「狂夜…お前は、最近よく夢を見るか？」

「夢ですか…確かに見ます。暗闇の中で縛られた男の神を数人の…神が殺す…！そういう夢です…」

俺が哀しそうに話すと生徒会長は腕を組み呟いた。

「やはり…」

「えっ…」

やはりってどういう事だ？「それは、前世の記憶だ…」

「前世？」

「そうだ…神が神を殺す時は大抵は重罪を犯した時だ…」

「そういえば、人をかばったって言ってました…」

「人を…重罪だな…」

「そんなに非道い事ですか！神が人を助けるって…」「かなりの重

罪だ…普通、神は神同士でしか助け合わない。神は、それ以外の種族とは馴れ合いをしない。」

「何故?!」

「何故か?知らないな…私が、昔の神の事など知るわけがない。」

「じゃあ何でそこまで知ってるんですか!」

「それは…」

生徒会長は再び息を整えた。

「それは、私が『神』だからだ…」

強い人が…」「そんな事ではない、この生徒会は前世の記憶を持つ者、神、悪魔、鬼しかいない生徒会なのだから…！」
それってもしかして…

「一般の人は我が生徒会にいないっ！！」

「そんな事言われても関係無いです。俺が生徒会に入る意味になりませんか…！」

「では、前世の記憶について知りたくないのか？」
うっ…

「知りたかったら、生徒会に入れ。」

「知りたいです…でも、いきなり入れと言われると困ります。」

「では、こうしよう。最近暴れている鬼を抑制してくれたら入らなくてもいい権利をやるう。ただし、失敗したら確実に入ってもらう。」

「
…

「分かりました。でも、鬼をつて人と鬼では、力の差が離れすぎです。」

「フッフ…何のために回りに武器が置いてあると思っっているんだ。」

まさか、まだこんな武器があるなんて…

俺は、腰に剣を差し学園の庭を歩いていた。

こんなの周りの人に見られたくないなあ…

ん？何かしているのか？

ふと、遠くの方で何か争うような声が聞こえる。

まさか鬼じゃ…

俺は、その声ができる方へ向かった。

「痛ってなー！ぶつかっつて謝りも無しか？コラ」男二人組（見る限り二年生）が一人の男子生徒（見る限り一年生）に文句をつけていた。

「なんとか言えよ！」

「・・・邪魔だ、退け！」男子生徒は先輩に向かって喧嘩言葉を吐いた。

「ああ？テメエ調子に乗ってるのか？おい！！」

一人二年生が一年生の胸ぐらを掴んだ。

「調子に乗る奴は仕置きしてやる！」

二年生の人は、一年の顔を殴ろうと拳を振りかざす。「邪魔だと…
言っているだろうが！！」

一年の男子は、殴られる前に右手の甲で殴った。

すると、二年生の男はアニメのように数メートル吹っ飛び壁に激突した。

「た、竹内！」

もう一人の男は、驚きを隠せないでいた。

「テメエ、生意気だ！」

もう一人の男子も拳を振りかざすが、それよりも早く一年が殴った
…甲で…

もう一人の男子も同じように吹っ飛んだ。

第1話 4 (終)

「あれは、非道い。一応注意しなければ。」

俺が近付こうとすると、一年生は急に呻き出した。

「やめろ…来るな…やめろ…俺に…俺の中に…俺の中に入って来るな？」

一年生は、右目を抑え地面に経たり混む。

一年の体が徐々に変化していく。

「あががああ…うぐぐぐ…あつああああ…」

一年の体はだんだん大きくゴツくなって頭からは、角が二本生えてきた。

「鬼！暴れていたのはあいつの事だったのか。」

それにしても、大きいな…こんな剣で何とかなるのか？

「うわああああ…何故この姿に…俺は望んでない…」 鬼は自分の姿に驚いて声を上げる。

「お前か…お前が！」

ギロリと俺を睨む鬼。

気づかれた！

「うはあああ！」

鬼は俺の方へすさまじい速さで走って来る。

「ち、近い！」

一瞬で間合いを詰められ鬼は俺の目の前に立ちはだかった。

「お前が！」

鬼は右手で右目を抑えたまま左手で俺を殴ってきた。「うおっ」

俺は殴られるギリギリの所で攻撃を避けた。

あ…あぶねええ…

鬼の攻撃は空振りに終わった。

「逃がすかあああああ」鬼の声はドスの効いた低くダークな声になっていった。再び鬼は俺に向けてパンチしてきた。

よ、避けきれねえかも…

見事にヒット！鬼のパンチは俺の胸部をえぐった。

バキバキバキバキ

「かはあああ！！」

口から血が大量にこぼれ、数メートル飛んだ。

学園の鉄柱にぶち当たる。「ぶぶぶふうふうふう…」口から真っ赤な血が更に飛び出た。

あ…あばらが2、3本折れてる…

俺は自分の胸部を撫で確かめる。

「どこに行つた！ああああ…目が…目が…！」

鬼の右目はだんだん赤く充血し右目を中心に根のような赤い筋が入り出した。

「きばきゅばあばきなかあたはやまかぬすさあああああああああ

ああああ…！」

鬼は最後には何を話しているのか分からないようになっていた。

「くう…どうしたら…」

今の俺じゃ動くのがやっとかもしれない…どうしたら…どうしたらいいんだ…

「夜…狂夜…狂夜…」

聞き慣れた声だった。力強い女性の…

生徒会長？一体どこから？見える範囲で見渡すが近くには誰もいない。

「ここだ。鞄の裏だ。」

声は確かに剣が納められている鞄から聞こえた。

鞄の裏を見ると、無線機のような小型の機械が付けられていた。

「生徒…会長…俺、どうすれば…」

「お前の信じる道を進め」は？

「と言っかつこいい言葉は言えないから心して聞け！」

「は…はあ…」

こんなときに冗談か…

すると、鬼はだんだん元の一年の姿に戻り出した。

「あっあああ…」

声と共に一年は、仰向けで倒れた。

「おおっ…元に戻った…」これで今回の件は終わり…「安心するのはまだ早い！取り付いていたのが出て来るぞ？」
えっ…

俺は急いで一年の方を見る。

一年の右目の赤い筋が塊となって…飛び出した！

「あれが、男子生徒をおかしくさせていた者だ。」

塊は中に取り俺を見下すように見ている。

俺は塊に近づく。

突然、塊は話し出した。

「よくも…邪魔したな…許さんぞ…！」

すると、塊は急に膨らみ弾けた。

中から、真っ赤に染まった悪魔のような鬼のような不気味な生命体が現れた。

「お前は…」

「人間…許さんぞ…！」

シュ

怪物（不気味な生命体）はそう話すと姿が無くなった。消えた！

「どこを見ている？」

後ろから怪物の音が…

俺が振り向く前に怪物は俺の左腰を殴った。

メリメリピシ…

「ぐっぐは…」

また血を吐いた。

骨が…

俺は腰を抑え呻いた。

「人間…殺す前に訊きたい事がある…あの呪文は誰からの教えだ？」
教えだど…

「言え！言わなければ殺す！」

怪物は俺に拳を振りかざす。

「私だ！」

怪物が俺を殴ろうとする直前に声がかかった。

「か…会長…」

無線から声を出していたはずの生徒会長が俺の目の前に…

「お前か…お前があのお呪文…を…お前、智天使か？」

怪物は会長を睨み付けていたがだんだん用心深く顔を見つめた。した。

「智天使？私は智天使ではない。…私は神だ！！」

驚いたかと言わんばかりのドヤ顔。

「何を言っている、智天使。智天使とはお前の肩書き…神の肩書き

ではないか。」

「何？」

「そんな事も忘れたか…人型になると記憶も鈍るらしいな…」

「何だと!？」

「まあ、そんな事はどうでもいい。智天使…お前は俺を裏切った。

その代償は貴様の命で償ってもらうぞ」 「裏切るだと!!」

「まさか、俺まで忘れたのか!? 情けないな…俺はバーサーク。思

い出したか?」 「思い出すわけないだろうが!!」

「ふん…死ね！」

次の瞬間、バーサークは消え一瞬にして会長の目の前に行った。

「くらえ…『バーサークイグニション!!』」

右拳を掲げると右拳に灼熱の炎が宿った。

「消える、裏切り者。」

拳を思い切り振りかざした。

「な…やめろ!!」

俺は立ち上がりバーサークに向かって走る。

俺はバーサークに突進した。

「フ…」

バーサークは読んでいたように振りかざすのを止め、俺を避けた。

「邪魔をするならお前から殺す！『バーサークイグニション！』」
バーサークは再び右拳に灼熱の炎を宿した。

「くらえ！」

右拳が当たる直前俺は思った。

俺：死ぬのか：こんな所で：まだ、前世の記憶の事聞いてないのに
な：くそ、俺はまだ死にたくねえ！死ぬ訳にはいかねえんだ！：
何だ：体が熱い：

右拳は俺の腹に向かって：パシッ

拳が止まった。

「何？」

俺は咄嗟にバーサークの拳を止めていた。

熱い：熱い：当たり前か：灼熱の炎を触っているのだからな：いや、
違う。この体がよじれる熱さは：ああああああああああああ
あああ！

「何をしている：離せ！人間！！」

拳を動かして捕まれた拳を外そうとする。

「人間？ハハハッ何を言ってるんだ。俺は神だ。」

「何をほざいている。お前は人間だ：」

「それはさつきまでの話だ。今の俺は神だ。」

「意味のわからん事をほざくな！」

「神の力を見せてやろう。」

「何だと？」

拳を放してやるとすぐに二歩下がって距離をとるバーサーク。

「嘗めてくれるな：俺をこけにした事後悔させてやる。」

バーサークは手を伸ばし、俺に向けて拳を振った。

「遅い：『神刺し』」

俺はバーサークの拳が当たる前にバーサークのみぞうちを右拳で打
った。

「ぐぼっ：」

今度はバーサークが血を吐き半歩後退した。

「な…何をした！」

「神速でパンチしたただけだ…神だけに…」

「何！！ふざけるな？これで終わりにしてやる…」

バーサークは後ろに下がって距離をとり、助走をつけて拳を構えた。

「『バーサークインパクト』」

「だから…遅いつて…」

バーサークがインパクトを決める前に心臓目掛けて神速でパンチした。

「『神刺し』」

「ああああああああああああああああああ…」バーサークの

心臓に穴が空いた…

心臓に穴が空き体が崩壊を始める…

「まさか、俺が人間ごときに…」

「だから、人間じゃない。神だ。」

「元が人間なのに神に成れるわけ…輪廻天象でもしたというのか。

確かさつき神刺しとか言う技を使っていたな…あれは確か…最強の

神…ライゼアルが使っていた技…：…：…：ぐ…：…：ぐはっ…：限界がきた

ようだ…俺も輪廻天象した…か…：…：…：…

声がだんだん薄れ体も透明になってやがてバーサークは消えた…

「輪廻天象だと…うつつくはっ…」

俺は血を吐きその場に倒れた。

朦朧とする意識の中で会長の声が聞こえた気がした…：…

第2話 1

ん？

お前は…

アイ……テイ……か…

久しぶりだな

「久しぶしいよ…ライゼ…」

ライゼ…ライゼ…

その呼び名変わらないな。

「ライゼ…もうすぐ僕は…そちらの世界に行くよ…」

生まれ変わりを連れて…

「う、うつつわあ！」

なんだ、今の夢は？

俺は、少しうなされて目をさました。

あれ？夢が変わってる……それにしても、誰だ？確か……アイ……

テ……何だっけ？うーん……ん？

ここ、家…だよな…確か俺は、学園で倒れて…

「あつ、気が付いたの？」ん？

「萌香っ！」

つてことは、やっぱりここは…家。

「何で俺ここにいるんだ？確か…学園に出たバーサークとかいう奴と戦って…」「何言ってるの？そんなのいないわよ。」

なに？

「狂夜は、生徒会長に呼ばれて庭園に行ったら鉄柱にぶつかってあ
ばら骨折ったんじゃない。」

何だ、そのドジな事件は…それに俺の骨はそんなに弱くない。って
そこじゃない！…じゃあ、あれも夢？そうだ、生徒会長は？

「生徒会長は、無事なのか？」

「無事？何言ってるのよ。狂夜を教室までおぶって来てくれたのよ。」

えっ……

「感謝しなさいよ。生徒会長は必死でおぶって来たんだからね明後
日にお礼言ってくるんだよ。」

「なんだか、おばさんみたいなセリフになってるぞ……………明後日
？」

「そう、生徒会長からも学園側からもあばら骨を折る重症何だから
最低でも2日は休めて。」

えっ…ええええええ！！

「それじゃあ私学園に行くから…しっかり安静にしててよね。」
そついうと萌香は俺の部屋を出ていった。

静かになる部屋。

安静か…

俺はベッドに横になり、布団をかぶる。

2日も寝なきゃいけねえのか。『全く困ったもんだぜ。』全くだな。
……って誰！？

俺の意識の中に誰かが入ってくる。

『ん？俺か？俺は、ライゼアル…ライゼアル・キリセルニティだ。
ら、ライゼアルきり？』

『ライゼアル・キリセルニティ……。神だ！』

じゃあ、あの時のバーサークも夢じゃないってことか？

『夢じゃない、戦っただろ。』

本当だったのか……

『どうしたよ、相棒？』

あ、相棒！？

『そつだ……これからは共になるんだ。』

な、何で？

『前に夢を見ただろ……俺が前世で殺される所を……その関連で俺がお前と一緒にする事が決まった。』

夢を見たただけでか？重罪を犯したんだろ。

『そのことだがな……実は、俺は前世で創成神と最高神から最強である称号（キルレイア 全てを司る者）をいただき、最強を名乗っていた。ある時、俺より2番目につよい、サイカルア・パラケトスという男に騙された。奴は、俺を罠にはめ死刑にした……』

俺は、その時の事を憎んでいる。だから、現世で奴と闘い決着をつける？

その為には体が必要だ……だから……』

駄目だ！！

『何だと？』

復讐の為に俺の体を使う事は俺が許さない！

『だったらどうすればいい。』

まずは、話し合いだ。

『それが駄目なら使わせてもらつぞ。』

構わない。

ピンポーン

ん？誰か来たのか？

「萌香！！誰か……」

あつ……そういえば学園行ってるんだっけ。仕方ないな俺は、折れたあばらを抑えて立ち上がった。階段を下り、玄関に向かった。

ピンポン

「今開けます。」

ガチャ

玄関の扉を開けると見た事ない少年が立っていた。

見た所さっぱりしたショートヘアに切れの長い瞳の以外と背の低い男の子だった。

何だ？この子を見ていると何だか胸がキュンとするような……

『こ、こいつは！？』

俺がじーつと少年を見ていると少年は声をかけてきた。

「あの……伊神……狂夜さんですか？」

見た目通り高い声の子だった。

「そうだけど……」

「お見舞いに来ました……」

へえーわざわざ。

『こいつは……』

どうした？ライゼアル。

『何で居るんだ。』

誰が？

『こいつだこいつ。お前の目の前の奴。』

この子は普通の男の子だぞ『何言ってるんだ！こいつは……』

「どうかしたんですか？」「いや、何でもないよ。」「そうですか

…あの少し上がってもいいですか？」

「べ、別に構わないけど」「良かった〜失礼します。」「

少年は頭を下げ玄関で靴を脱ぐ。脱いだ靴をきちんと整頓している。

何ていい子何だ〜

少年は俺を抜けてリビングへ向かう。

少年が通った後はとても良い匂いがした。

はあはあはあ……

『お前、おかしいぞ。』

な、何が…はあはあ…

『男は男とは釣り合わんぞ。』

知ってるよ…俺にそんな趣味はない。

俺も少年の後をいきなりビングへ行つた。

リビングに入るといきなり少年に押し倒された。

「おっお？どうした？」

「狂夜さん好きです。付き合つて下さい。」

……………ん？何！？まさか男に告られるだど！……………

……………でもこの子ならいい気がする……………

『お前、騙されてるな……………そいつの胸を触つて見る。』

男に胸はないぞ。

『いいから、押し倒されたんなら押し返してやれよ。』

でも……………

『男何だろ。』

……………分かつたよ。

「狂夜さん……………？」

「うおおおおおおお！！」俺の上に乗っていた少年を押し返し、

逆に俺が上になった。

「きよ…狂夜さん……………」

俺は、ライゼアルが言った通り胸を両手で鷲掴みした。

フツ、ほら何も無いぞ……………何も……………？

俺が触つているところには確かに何も無いはず…だが何か違和感を

感じる。

フニユフニユ……………

「ああっ、狂夜さんっ……………」何だ？男なのにやわらかいものが……………

『まだ、分からののか。胸だよ胸。おっぱい……………分かるか？』

分かつとるわ？そこじゃなくて……………この子はもしかして……………

『女だな。』

何……………？

第2話 2

「女…女の子だと!!」

俺は、胸に手を当てたまま固まる。

女…女…女…女…女…女…「きゃっ。いやっ…」

退くように俺の手から逃げる少女。

俺は…女の子に告白されたのか? いや…胸があるからと言って女とは限らない! 下に付いてるかも。

『何を言ってるんだお前は? 胸触りゃあ女って分かるだろ。』

ライゼアル、君は過去の神だから知らないと思うけど現代では、上も下も生えている人間だって居るんだ!! 確かめるぞ…確かめてやる。

『まだ分からないのか? ……こいつ…! そうかそういうことか。』

ライゼアル、止めても無駄だからな!

「き、君。男か女が確かめる為に確認したい事があるんだけど…」

俺は、ゆっくりと少女に歩み寄る。

はあはあはあはあ…何だろっ…この子を見ると呼吸が弾む…

「いやっ…やめてっ…」 『はあ…仕方ねえな…いい加減にしろ!』

少女に歩み寄っていた狂夜の動きが止まった。

「何だ? う、動けない!」 『当たり前だ。俺とお前は一心同体何だからな。』

何をした?

『理性を戻しただけだ。』 『理性…!』

『そうだ、お前は普通じゃない。今のお前は…惑わされている。』
『どういうことだ?』

『まあ心の中で話すより実際に表に出た方がいいな』な、何！？
『代われ！！』

ああっ……ああああ……「おい、そこのガキ！！」
「狂夜さん……？」

狂夜は、中身が入れ代わりライゼアルになった。ライゼアルになると髪が逆立ち白くなるようだ。

「狂夜さん一体どうしたんですか？」

「いい加減、芝居はやめろ……俺には分かるぞ。」

「な、なんの事……？」

「フツ……とほけるか。そういうとこ変わらないな…アイ」

「アイ？僕はアイじゃないよ。」

「隠すな。ガキに化けてもお前の匂いは隠せない。男も女も魅了する欲望の称号チャームを持つ……アイル・テイル」

その言葉を聞くと少女は目をかっ^と開いていたが諦めたように俯いた。

「やっぱり、バレちゃったか……ライゼにはかなわないな……」

「その呼び名変わらないな…アイ」

ライゼアルの反応に顔をぱあ^とと明るくして再び狂夜に抱きついた。

「やっぱりライゼだったんだ　もう二度と離さない」狂夜の体を強く抱き締める。

「やめろってアイ。」

少し照れ顔のライゼアル。「もう二度と手離さない。ライゼ、ライゼライゼ」「おい、やめろって…本当にやめないと…殺すぞ！」
照れ顔から真顔に…

「いやん、恐い〜ライゼが言つと本気みたい。」

「本気だからね。」

アイは抱き締めるのを止めライゼアルから離れた。

「ライゼ、久しぶりの再会がそれでいいの？」

「気持ち悪い。」

「非道い。非道いよ。」

「俺の使っているこの体の持ち主…伊神狂夜。その男と俺の意見は偶然にも同じだった。」

「何が？」

「男同士は結婚出来ない！男は嫌いだな？」

「男？何言ってるの？僕…」

「お前は前世、男だっただろ！」

「今は女だよ。昔は昔、今は今。」

「転生ミスか。」

「うっ…でも今は女である事を認めてるんだ。」

「僕って言う女か？」

「ライゼ…現代ではそういうのボーイッシュって言って人気があるんだよ。」

「知らないな…」

首を傾げるライゼアル

「まあ、女の子の経験の乏しいライゼじゃ知らないもんね。」

「何だと…！」

怒り顔でムキになるライゼアル。

「だから、僕がそういう所直してあげるからね。」

ライゼアルにウインクをするアイ。

「フフフッ」

「ライゼ？」

「どこから潰されたい？」「どこからって？」

「体のどの部分だ？」

「えっと…胸が小さいから胸部を…ライゼ、巨乳好きでしょ？だから…」

「そうか、心臓か…」

「えっ…」

「『神刺し』」

アイの心臓に向けてライゼアルは神速でパンチした。「はっ…」
ライゼアルは心臓に当たる直前で手を止めた。

「……………何で……………」

「何？」

「何で来た？」

「ライゼに会いたくて……………」
「それは……………本当の目的じゃない。さっきも言っただろ……………俺に嘘はつけない。」

ライゼアル（狂夜）は真っ直ぐな瞳でアイを見つめた。「ライゼ……………やっぱり昔と変わらないね。流石だよ」
「アイはその瞳に應えるように話した。」

「奴等が……………動き出した……………」

第2話 2 (後書き)

…を偶数個にし忘れてましたので、…。

…はそのままでお願いします???

…などのように奇数になっていた場合は…を1つ無いものとして下さい。

1話から…の数を間違えていると思うので以上の事に気をつけてお読み下さい。手間をかけさせてすみませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5396u/>

輪廻天象

2011年10月9日10時27分発行